青森市古川の横断歩道橋＝1968（昭和43）年・竹内義文さん撮影・義人さん提供

県都の横断歩道橋

中園　裕
（県民生活文化課県史編さんグループ主幹）

1960年代半ば以降、青森県でも都市部を中心に自動車が激増し、交通事故が多発した。各種の事故防止対策がなされたが、その一つに横断歩道橋の設置がある。

県で最初に歩道橋が設置された場所は青森市中央の浦町小学校前である。1967（昭和42）年12月25日に完成し、渡り初めが行われた。歩道橋は交通弱者でもある子どもたちを守るために設置された。このため「よい子の橋」と名付けられた。

1968（昭和43）年3月、国道7号が通る青森市の古川に歩道橋が完成し、4月から利用が開始された。この場所は国道に対して浪館通り、中央古川通り、旭町通り、昭和通りが交わる。道路幅も広く自動車の交通量は県内有数だった。

当時、まだ歩道橋は珍しかった。このため青森市役所の職員だった竹内義文さんは、架橋間もないころ、古川の歩道橋上から国道と周辺の街並みを撮影している。掲載した写真は歩道橋東側の県庁方面を写したものである。息子の義人さんが保存し、今回提供してくれたものだ。

右側に工藤パンの支店と亀屋みなみ洋品店が見える。どちらも人が集まる古川に店舗を設けて営業成績を伸ばしている。この写真が撮影された5年後の1973（昭和48）年、亀屋みなみは松木屋、カネ長武田に続く青森市で3つめのデパートとなった。翌年7月27日には、工藤パンの支店があった場所にホテルやレストランを備えた工藤パンビルが開店した。その後経営者は替わったが、現在もホテルとコンビニが入居し、ビル前は大勢の人が集う場所である。

古川に続き、県庁前の国道に長島横断歩道橋ができた。南側に長島小学校があるため、新町方面からの小学生は国道を渡らねばならなかった。古川歩道橋も南側に古川小学校があった。歩道橋は自動車から子どもたちを守る〝命の橋〟なのだ。

1969（昭和44）年の春から夏にかけて、長島歩道橋の下をネブタが通れるかどうかが市民の間で議論を呼んだ。通常、歩道橋の高さは全国一律に路面から橋桁の下端まで4・5メートルだった。しかし青森観光協会が5・5メートルを要求。国道工事事務所との間で何度か話し合いの結果、双方が妥協して5・2メートルになった。

その後、古川と県庁前に国道を渡るための地下道が造られ、長島歩道橋は撤去された。ネブタの運行問題に加え、積雪期の歩道橋は吹雪けば危険であり、積雪が凍れば階段の昇降が困難になるからだ。

県都の歩道橋は、ネブタの運行や豪雪という課題を背負っている。今も現役であり続ける古川歩道橋は、県都の横断歩道橋が歩んだ歴史を象徴する存在といえるだろう。